



ポーランド オーディオショー見学記

編集委員 森 芳久

昨年に引き続き今年もまたポーランドのオーディオショーにやってきた。昨年まで Hi-Fi Show と銘打ったこのショーが、今年は Audio Video Show と名前を変えていたのが興味深かった。これは、この国でも大型画面やプロジェクターの普及が進み、ホームシアター市場にも弾みがついてきている表れであろう。

昨年 3 カ所のホテルで行われた会場が、今年はメイン会場としてワルシャワ市の中央スタジアムに加え、Hotel Radisson Blu Sobieski と Hotel Golden Tulip の三カ所となり、その規模も昨年の 110 室から 141 室と大きな飛躍を果たしていた。また、それらの会場を結ぶ無料シャトルバスが 30 分毎に運行され、会場移動がとても楽にできることも嬉しいサービスである。

今年はこのショーのガイドブックが発行され、そこには詳しい会場案内図や見所が満載され、またスポンサーの一社である TIDAL (音楽配信会社) の 3 ヶ月間無料試聴券が付録となるなど、ショーの楽しさを演出すると同時に来場者を満足させる配慮がされていた。

広報資料にもヨーロッパ第 2 の規模を誇るオーディオショーと標榜されているが、確かに今回はショーの規模もまたその内容も充実した中身の濃いものとなっていた。

開催期間も昨年は土日の 2 日間のみであったが、今年は 11 月 6 日～8 日の 3 日間となり、初日 6 日 (金) は夕方のスタートで 16～20 時まで、また 7 日 (土) は 10～20 時、最終日 8 日 (日) は 10～18 時というスケジュールが組まれ、3 日間とも大きな賑わいをみせた。

入場料は 1 日券が 30zł (1,000 円強、但し中学生以下は無料)、通し券は 40zł (約 1,400 円) と、この国では安いとはいえないが、それでも多くの人々が押し掛けてきているのはショーの内容が充実し、その広報活動にも力を入れている証拠であろう。事実、昨年 2 日間で 8,000 人を超えたと発表された入場者数は、今年はショーが終わった時点での集計で 11,214 人と細かな数字が発表された。これは入場料を支払い、または招待券などにより正式に入場チケットを入手した入場者の数である。このように正確な数字を発表することで、ショー自体の信用性を高めているし、出展者もまた正確にその反応を知ることができるのである。残念ながら日本では未だに公称数字という楽観的数字が横行しているが、このような悪習は早く止めるべきであろう。

もちろん来場者の数字よりその質が重要であるが、この会場に来ている人々を見る限り、かつての日本のオーディオフェアに集まった熱心なオーディオファンに重なる部分が多い。特筆すべきは、家族連れやカップルがとても多いことである。小学生にも満たない子供達が熱心に音を聴いている姿は、今日の日本では見られなくなった光景である。

確かに会場にはショーを楽しませるいろいろな仕掛けがある。会場のあちらこちらでコンパニオンたちが飴やチョコレートを配り、また多くのブースでキーホルダー、手提げ袋、鉛筆、ボールペンなどの景品を用意していることも来場者には嬉しいサービスである。それらは真のオーディオとは違うというお叱りもあるかもしれないが、こうして家族連れや恋人を同伴しても楽しめる催しもまたオーディオ愛好家をおたく化させず理解者を増やすためにも大いに評価されるべき

であろう。

それでは、会場の様子を写真でご案内しよう。

尚、ポーランドについての一般事情は [JAS ジャーナル 2014 年 11 月号](#) でも触れたのでそちらを参照されたい。



(写真 1)

今回のメイン会場が中央スタジアムとなり、1 階（日本では 2 階）と 2 階（日本では 3 階）の回廊と小部屋が会場となった。



(写真 2)

昨年と同様に Hotel Radisson Blu Sobieski も重要な会場となり、ホテルの客室とギャラリーで各社のサウンドデモと展示が行われた。



(写真 3a、3b)

Radisson Blu Sobieski の近くの Hotel Golden Tulip のイベントルーム 8 室も、ゆったりとしたスペースを生かしたサウンドデモが行われた。



(写真 4) メイン会場とホテルを結ぶ無料シャトルバス。30 分毎に運行。



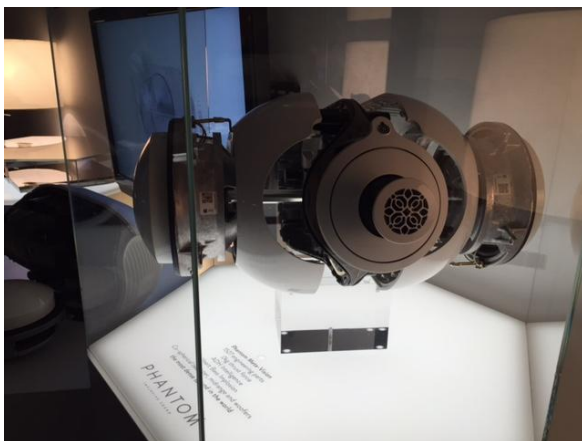
(写真 5) ワルシャワで最もお洒落な高級オーディオ店舗を構える HITON のハイセンスなブース。HITON はポーランドにおけるドイツの T+A の代理店でもある。



(写真 6) 昨年このショーで Technics ブランド復活を高らかにアナウンスしたが、今年も力を入れてサウンドデモを行っていた。最近ショーから姿を消す日本メーカーも多いが、是非頑張ってもらいたいものである。



(写真 7) ターンテーブルの雄 TRANSROTOR のブース。この国でも大型ターンテーブルの人気は高い。



(写真 8) Devialet が発明したスピーカー Phantom。昨年末発表され話題となったがここでも人気を集めていた。やはりこの音はロックを聴くとそれなりの説得力がある。オーディオを面白くしてくれる予感がする。



(写真 9) 360° 放射型スピーカーの老舗 mbi のスピーカー 111F。会場が狭いためか、中級クラスのノーブルラインのセットでのデモだったが、部屋の縦長方向にスピーカーを配し、まとまりの良い音が印象的であった。



(写真 10)

Zeta Zero の 360° 放射型スピーカー。その名も ORBITAL360。音楽家また技術者の Tomasz Rogula 氏が自ら設計開発しているポーランドのメーカーである。若い頃彼女に良い音をプレゼントするために開発したというエピソードも微笑ましい。自分の息子と呼ぶスピーカーと 2 ショット。



(写真 11)

ヨーロッパのオーディオ界で最も有名な日本人と言えば Marantz の ken Ishiwata 氏をおいて他はいない。ヨーロッパのショー会場で彼の顔を見ないことは無いほどだ。現在も同社のオーディオ大使として世界を駆け回っている。同社記念モデル PM-14S1、SA-14S1 の前でのショット。



(写真 12)

WILSON AUDIO のブース。日本製 AIR TIGHT のアンプもヨーロッパで大活躍している。



(写真 13) オーディオテクニカのコンパニオン。彼女と一緒に写真を撮ってフェイスブックに上げると「いいね」の数に応じて景品がもらえるそうだ。



(写真 14) こちらはキャンディーを配る美女たち。このポーランド製の飴がまた美味しい。何度も貰ってしまったが、飴の魅力だけではなさそうだ。



(写真 15) 去年に続き今年もヘッドホンのブースが目立った。主催者の配慮でヘッドホンのメーカーや出展者はできるだけ近接した部屋、また大部屋に何社も一緒にブースが設けられていた。



(写真 16) Olasonic のナノコンボもポーランドで販売が開始され、その小型でスマートなデザインが若者に人気を博していた。



(写真 17) SONY の現地法人による 4K プロジェクターで映像のデモ。満席の盛況だったが、残念なことにオーディオ機器は他社製品であった。



(写真 18) McIntosh のブース。伝説のロックバンド、グレイトル・デッドの歴史的コンサートの壁紙の装飾が部屋の雰囲気盛り上げてくれる。



(写真 19) Hotel Golden Tulip の ayon audio と Lumen White ブース。広々とした部屋でのサウンドデモが成功していた。



(写真 20) これも Hotel Golden Tulip の MARTIN LOGAN のブース。NEOLITH の静電型独特の音もまた魅力だ。



(写真 21) Mytek Digital と SVEDA AUDIO のブース。SVEDA AUDIO はポーランドのメーカーでスピーカーを製造、Mytek Digital はアメリカの会社でヨーロッパの販売拠点をポーランドに持っている。



(写真 22) Keith Monks の RCM (レコードクリーニングマシン)。ポーランドでも LP レコードの人気の年々高まっている。それに呼応して RCM 発売 45 周年を記念した特別モデル discOver mini One Sapphire を展示デモしていた。



(写真 23a、23b) 会場にはカップルや子供連れが目立つ。特にヘッドホンや DAP の人気が高い。

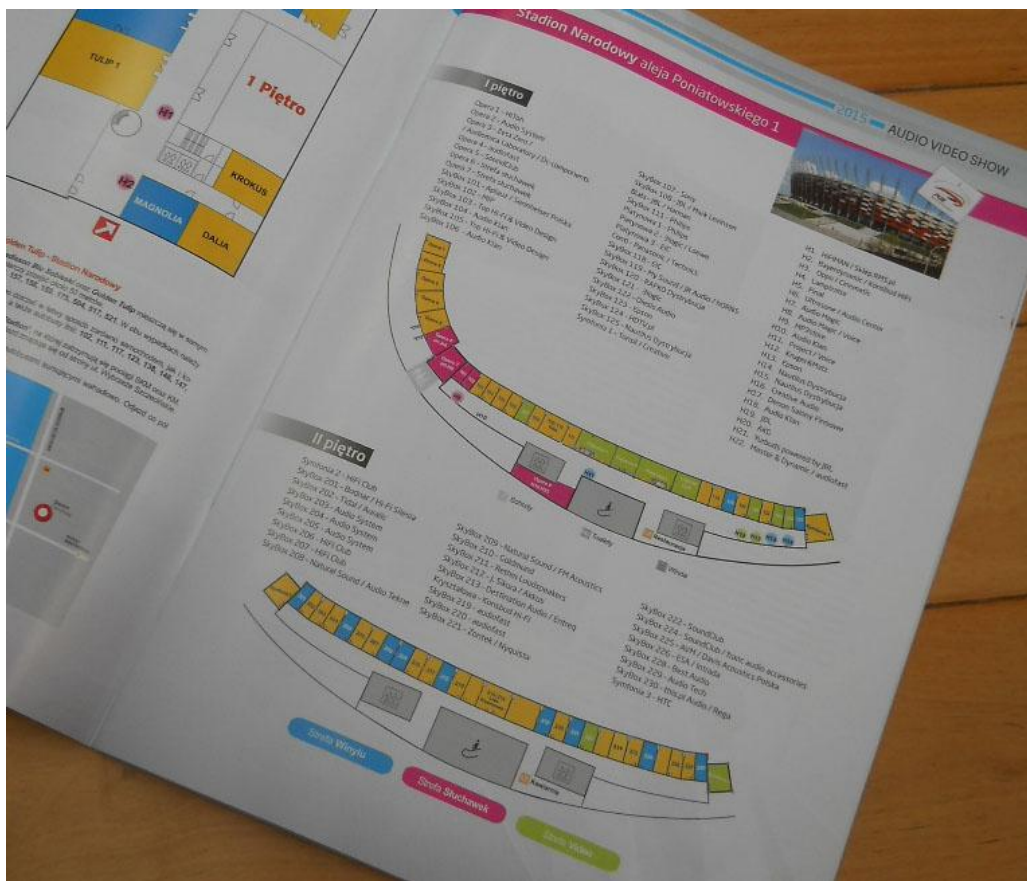


(写真 24)

今回気になったスピーカーが REBEL というポーランド製の小型スピーカーだ。今年創立されたばかりの新会社の第一作目のスピーカーだ。なかなかバランスが良く心に響く音で、ペアで約 10 万円という価格も魅力だ。持参した仲野真世トリオの演奏が生々しく聴こえた。



(写真 25a、25b) 無料で配布されるショーのガイドブック。64 ページの小冊子で、ショーの案内図や見所など親切な解説と各出展者のワンポイント紹介など、資料としても貴重なものだ。



(写真 25c) 会場のブース案内図には、ヘッドホン関連は赤色、LP レコード関連は青色、ビデオ関連は緑色、オーディオコンポーネントは黄色と色分けされ、来場者に親切な配慮がされている。

以上、駆け足での説明ではあったが、少しでもポーランドのオーディオ事情をご理解いただければ幸いである。3 日間このショーの会場にいて感じた事、それは「オーディオは楽しい」、だから「誰もがもっと気楽に楽しもう」、ならば「皆で最高のショーにしよう」という関係者の強い意志があり、それを来場者が肌で感じ取っていたということである。それは、かつて第二次大戦で徹底的に破壊された市街地を、その瓦礫ひとつひとつを拾い集めて完全に元の街並に戻し、その意地と誇りを見せたこの国民気質に通じるものがあるように思われた。

蛇足であるが、地動説を唱えたニコライ・コペルニクス、二度のノーベル賞受賞者キュリー夫人、そしてショパンなどの偉人を生んだポーランド。機会があれば是非この国に足を運んでみてはいかがだろうか。



(写真 26) コペルニクスの銅像。



(写真 27) マリア・キュリー博物館(生家)。



(写真 28a)

ショパン博物館（これらは全てワルシャワ市内にある）。



(写真 28b) ショパン博物館の標識